

辻のあやかし斬り夜四郎 呪われ侍事件帖

井田いづ Idu Ida



アルファポリス文庫

<https://www.alphapolis.co.jp/>

序

冷たく吹いたつむじ風が色づいた落ち葉を巻き上げて、たまは思わず身震いした。この破れ寺に火鉢などという気の利いたものはない。庭先を見やれば、寺に棲みついだ鳥が一羽、舞う落ち葉と戯れるようにして遊んでいる。

町はずれのこの寺で、たまと夜四郎は揃って紙に筆を走らせていた。たまがあやかしの絵を描き、夜四郎がそこに物語を書き添える。

墨で描かれるのは、あやかしたちとその物語だ。彼らを忘れないための、二人で紡ぐあやかし手帖。百八の物語を集めるためにこれを作るようになつてから半年が経とうとしていた。

「夜四郎さま」

たまは筆を止めて侍を見上げた。十四を数えるたまよりもうんと大きいその背中は、ずいぶんと疲れて見える。

「手帖も厚くなりましたね」

「そうだな」「すぐですよ、百八なんて」

「そうだといい」

夜四郎も筆を止めて領いた。

最初こそ、その数にたまげたものの、一緒に奔走するうちにそう遠くない目標に思えてきた。なにせ、たまはしおつちゅうその手の話を持つてくる。夜四郎の悲願も、うまくいけば年内に達成できるのではないか。

時折その先のことを考えてしまうが、まずは目の前のことを一つずつ。急いてもろくなことはなし……というのはたまの座右の銘でもある。

二人で描き終わつたものを確認して、それから満足そうに夜四郎は領いた。

「それだけ長いことおまえさんの世話になつているということだな」

これからも頼むぜ、という夜四郎に、たまはドンと胸を叩いて見せた。どちらかといえ巴、たまが世話になつている面の方が大きいのだが、あの日交わした約束は持ちつ持たれつ、だ。

もしもあるの晩、あの辻で出会わなかつたらと、たまはふと考へる。

傍らで、風に遊ばれてぱらりぱらりと手帖が捲れ、一番初めの頁が開かれた。この頁が描かれたのは、たまと夜四郎の出会い、まだ春の香りが残る頃……

壱話目 ろくろくび



くらい夜だった。

びゅうびゅうと冷たい風が吹きつけていた。その中を女は軽い身なりで——それでも裸足のまま歩いていた。風に巻き上げられて乱れた髪が顔にかかるでもお構いなしに、女は歩く。

すでに夜深く、通りにはほかに誰の姿もない。

一步、また一步と踏み出すたびに小石が柔肌に食い込んで血を滲ませる。それでも女は止まらない。ただただうつろな目でどこかを見つめながら、灯りの落ちた道をどこへともなく進んでいく。

——ああ、悲しい。

——なのに、愛おしや。

——ほんとうに、恨めしや。

きっと迎えに来るといった男を、女はずいぶんと待ち続けた。首を長くして待ち続けた。あんな奴を信じるなんて馬鹿な女だ、あいつは逃げた、おまえを捨てたのだと周りからどんなに誇られるても、それでも女は諦めきれなかつた。

その間、春が何遍来たことか。夏が、秋が、冬が何遍来たことか。

どれだけ待ち続けてもあの男はついぞ女の元へは来なかつた。細々と来ていた便りすら途絶えて久しい。それでも女は約束一つを信じて待ち続けていたのだ。

——ほんとうに、ひどい人。

あの盗人は人の心を盗んで、人の一番の宝を盗んで、一体どこへ消えてしまつたのだろう。何処かでのうのうと生きているのだろうか。一緒に消えてしまつたあの子はどうなつたのだろう。きっと母である自分の顔も——存在すら知らないで生きているのだろう。

何もわからないのだ。女は何一つ知らなかつた。

——全てを知りたい。苦しいくらいに憎らしい。

——けれど何も知りたくない。怖くて、恐ろしい。

こうも無力に裏切られるのなら、たくさんの季節を無駄にするくらいなら、せめてあの男に一泡吹かせてやれたらよかつたのに。一言己が悪かつたと、迎えに行けなくてすまなかつたと言わせてやれれば、それだけで。

今日も町の何処にも男はいなかつた。家にも勿論来なかつた。便り一つ来なかつた。ぶつん、と女の中で何かが切れた。

女はようやくその足を止める。目の前に影を落とすのは、見上げるばかりに背の高い大きな松の木。

「ああ、恨めしや——」

吹いた風に首を長くした女の影がぶらりと揺れる。

壱

いつ頃からか、その辻には辻斬りが出るらしいとけつたいたな噂が立つていた。しかもただの辻斬りではない、その形をしたあやかしだというのだから余計に不気味だった。

噂好きな人々の口にあやかしの話が絶えないのは常のことだし、昨今流行つている怪談の数々も今に始まつた話でもない。……ないのだが、よりもよつて一人で出かけている時にそれを思い出してしまつなんて——お遣いからの帰り道、たまは思わず身震いした。

堪つたもんじやないとたまは思う。だつて件のその辻は、たまが働く団子屋の目と鼻の先にあるのだ。何処か遠いお城なり、知らない土地でのお話ならともかく、きわめて身近な場所なのがいけない。つい気になつて、ついあれやこれやと考えてしまつて、殊更怖いつたらぬのである。ひゅうどろろ、そんな風が吹くだけで毎度毎度震え上がつてしまうのも、仕方のないことなのだ。

その辻のあやかしについては法螺話はらばなしだという人も少なくはない。

なにせ、誰が調べても何の痕跡も見つからないのだ。誰かが人らしき影を斬るのを遠目に見た人はいる。誰かがそれに斬られる様を遠目に見た人もいる。

それなのに斬られたはずの死体を見た人も、斬つたその辻斬りの姿をハツキリと見えた人もどこにもいないのでだ。

辻に差し掛かるところで辻斬りを見たような気がして、おつかなびつくりそこへ行つてみれば死人も答人もいなく、もぬけの殻がらだつたとか。一度噂におびえた町の人泣きつかれた岡つ引きが渋々様子を見に来た時もやはり何もない。

それが一層話を不気味に仕立てていた。

辻斬りはやはりあやかしで、斬つた人を妖力で消してしまつたのだろうか。それとも異様に片付けが上手い人間の辻斬りなのだろうか。はたまた酔つ払いの見た幻だつたのか。

辻斬りはやはりあやかしで、斬つた人を妖力で消してしまつたのだろうか。それとも異様に片付けが上手い人間の辻斬りなのだろうか。はたまた酔つ払いの見た幻だつたのか。

あんなのはただの作り話さ、怖がることはないと団子屋に来た客も言っていた。事実人が斬られていたとして、その惨劇の現場に血の一滴もないなんてことはあり得ないのだからと。

しかし、そんなことはたまにはどうだつていい。

——嘘でも本当でも、怖いもんは怖いのよ。

菓子箱を包んだ風呂敷をぎゅっと抱えて、たまはだんだんと駆け足になつていく。お得意様に饅頭を届けた帰り道である。頼まれたものを届けて終わり……のはずが、お茶をいただくついでに当の届けた菓子までいただいて、ついには昼餉まで駆走になつてしまつたのだ。得意先の老夫婦はたまを孫娘のように可愛がつて、会うたびに色々な話をしてくれるものだから、帰る頃にはとっぷりと日は落ちていた。

たまの帰りがこうやつて遅くなるのは今日が初めてのことでもない。実年齢よりも

いくばくか幼く見られがちなたまは、行く先々でなんやかんやとご馳走になるものだから、おかみさんもだんなさんも帰りが遅くなることは想定済みだろう。

こちら辺は物騒な噂も（辻のあやかしの話以外は）聞かないし、たまとしてもきっと二人ともそんなに心配はしていないだろうとも思つ。今日はお店の方もそう忙しくはなかつたから、その点についても何ら問題はない。

問題は、帰りが夕刻を過ぎてしまったということだ。

暮れ六ツの逢魔時おうまがどき——まだそう遅くもない時刻だというのに、通りに他の人影は見当たらない。きっと家の中にはいるのだろうが、通りを歩くのはたまだけである。があがあと鳥のわめき声だけが響き渡る。

なにも一日中こんなに閑散としているわけではない。

朝晩は辻売りや町人なんぞで賑わうし、夜も屋台や蕎麦屋が出たり飲み屋が開いたりで大いに……とはいかないまでも、多少なりは賑わっている。しかしながらこの時間帯だけは、ほつかりと空洞が空いたみたいに人の気配がまるきりしなくなるのである。

仄暗くなりかけた空の下、件の辻に差し掛かる手前——そこでたまは足を止めた。人影だ。

見れば二つの影が忙しく動いている。追いかけているのか、喧嘩でもしているのか。背格好を見るにどちらも男だろう。それがどんどんこちらに近づいてくる。

たまは菓子箱を胸にきつく抱いて一步退がつた。

まさか、件のあやかしとその被害者か。もしくはただの連れあつて歩く町人なのか。安心してもいいのか、いけないのか。考えている間にも影は近づいてくる。

せめて身は隠そうと天水桶てんすいおけのそばから首だけを出して、目を凝らして——すぐに答えは出た。

迅じん、と風が鳴いたように聞こえた。

だんだんとはつきり視えてくる。片方の男は抜き身の刀を手にしていた。もう一人の首を横薙ぎに一閃したのだと遅れて理解する。血飛沫の如き黒煙がぶわりと男から噴き上がるのもわかった。それら全てがほんと落ちかけた夕陽によつて影絵になつて、男の首が飛ぶのまでもがよく見えた。どさりと男の体が地面に崩れて、遅れて頭が落ちた。

たまは必死に手で口元を押さえた。悲鳴は何とか呑み込んで、それでも、歯が鳴つてしまふ。

一部始終見てしまった。辻のあやかしの蛮行を観てしまつた。

たまはもう一步退がる。

震えた腕から空の菓子箱がこぼれ落ちて、がらんがらんと派手な音を立てて転がつた。抜き身の刀を握った男の目がこちらに向く。のつしりと歩いてくる影に叫ぼうにも、息を大きく呑み込んでしまつて声も出ない。

「ひ、い……」

こちらを向いた男の口が開いたような気がして、男が何かを言いかけて——。それを見届ける前に、たまは意識を手放すことを選んだ。

たまは、おつかないことは嫌いなのだ。



——実に恐ろしい夢を見た。

人斬りの現場を見てしまい、辻斬りに見つかってしまった夢。きっと夢に違いない。絵草紙か何かを眺めているような——とにかく現実味のない光景だった。

夕闇に沈む辻、鋭い風切り音、ごろりと落ちた首の影、噴き出す血飛沫、そしてこちらに向かつてくる辻斬りの——

はつとたまは意識を覚醒させた。

あれからどれだけ経つたのだろう。外は既にとつぶりと夜に浸かり、星空やが破れ寺でらの役割を半ば放棄しつつある天井の隙間から、顔を覗かせていく。

——此処はどこだろう。

たまは痛む頭を押さえながらのそりと身を起こした。枕元には菓子箱がきちんとお行儀よく並んでいる。袂たれに入れておいた巾着はそのままだし、身に着けた何もかもが普段のままである。当然だが切り傷一つない。

「……たまは道中で、居眠りを……？」

まさか！　たまは思わず頬をぺちんと叩いてみた。ちゃんと痛い。痛いということ

は、今はもう夢の中などではない。そんなまさか！ いくら抜けたところのあるたまたて、道端で眠りこけるなど、そこまでうつかり者ではないはずだ。

たまは座りなおして、何処から夢なのかと考えてみる。菓子箱の中は空っぽで、お遣いに行つたのは夢ではない。腹の虫もおとなしいのだから、昼餉をいただいたのも確かだ。

しかし帰り道に、こんな破れ寺などあつただろうか。あつたとして、いくら疲れていたとしても、そんな所でわざわざ居眠りするだろうか。店は目と鼻の先だったのに——そもそも、たまは辻を歩いていなかつたか。歩いていたはずだ。帰るべき場所の近くにいたのに、わざわざこんな所に移動するものだろうか——

くん、と鼻を鳴らすとやや焦げ臭いような香りがした。近いものはかるいもだが、今は春である。やや時季外れだ。耳をすませば、どこかで人が動く音も聞こえる。

どうやら誰かが道端で眠りこけたたまを、ここまで運んできたらしい——とたまは結論付けた。

その人がただの親切な人なのか、はたまた、たまを気絶させてここまで運んだ人攫いなのか（だとしたら随分気の抜けた人攫いにはなるが）、もしくは何も知らないたまたま近くを通つただけ人なのかも知らない。知らないが、今は逃げるに限るというなら今のうちに逃げねばばかだ。大間抜けだ。

——ようし、今のうちに逃げちやおう。

たまはすぐにそう決めた。

音を立てないようにならうように移動して、手近な障子戸（の体をギリギリ保つているだけの板）をそつと横に動かした。

隙間からそろりそろりと軒先に出れば、たまの履物がきちんと揃えて置いてある。たまは大方ガサツに出来ているので、履物まで整然としていると、いよいよ自分でここまで来たという説はなくなつた。

はたしてたまを助けた理由は親切心からなのか、邪な企みあつてのことなのか——たまにはその所がわからないので、気休めに背後に向けてお辞儀を一つしてから、そそくさと出ていくことにした。

たまはめっぽう怖がりだ。

奇怪な事象やあやかし、怪談話は勿論、怖い。しかし更に怖いのは生身の人間だと知っている。人斬りも人攫いも怖ければ、怒つたおかみさんも大変恐ろしい。帰るの

が夕方ならまだしも、無断でこんなにも遅くなってしまった、きっとうんと叱られるに決まっていた。

古い木ののっぽな影、植え込みの低い影、隙間から月明かりの溢れる屏の傍……と目立たぬように抜き足差し足で移動して、これまた古くて崩れかけた門まで歩く。首だけを門から出して見渡せば、右手の奥に橋が架かって、見覚えのありそうな景色が続いている気がした。なるほど、ここはあの辻の近所らしい。

だだつ広い境内にはたまの歩く音だけが小さく響いていた。他に音はない。

そこでふう、と気を緩めたのがいけなかつたのかもしれない。

背後からぬうつと影が伸びて、頭の上から声が降つて来たのだ。

「おう、元気になつたか。帰る前にちと話を聞きたいんだが……」

振り返る。見上げる。目が合う。

音もなく気配もなく、いつの間にかそこに人がいたのである。

見覚えがあつた。

無造作に束ねられたボサボサの総髪に、鋭い瞳。無精ひげが生え放題で、身につけた小袖も袴も随分くたびれて所々ほつれて見える。

浪人者だろうか。よっぽど家計が火の車なお侍なのか。いや、そんなことはどうでもいい。ただ一つ確かなこと——あの瞬間は顔も姿も真つ暗で見えていなかつたのだが

「ひいいいいやああああああああ！」

今度はしつかり悲鳴が出た。

二度目なので、流石に失神まではしない。代わりに夜闇を裂いて響き渡つた悲鳴に、男は耳を押さえる仕草で応えた。視線がかち合うと、男はどこか安心したように息を吐く。

「よかつた、そんだけでさえ声が出たら大丈夫そうだな。打ちどころも悪くなかったらしい」

出た言葉は呑気なものだつた。あまりに呑気すぎて、得体の知れないものを感じたままはぞつとして後退る。

团子屋の娘にすぎないたまは、何処にでもいる非力な少女でしかない。帯刀している相手に背後を取られて、どうこうできる力も技も持ち合わせていない。しかし目と目を合わせて、悲鳴まで浴びせたのだ。今更無視もできない。

必死に思考を巡らせた末、たまは相手の良心に訴ることにした。

「おおおお許しくださいませ、いい命ばかりは、おおお助けくださいませ！」

言葉の勢いのままその場に膝をついて、頭を地面に擦り付けて懇願する。男としても予想外の行動だったのか、覗面に狼狽し始めた。

「待て待て、俺はまだ何も言つてはいないだろう！　おまえさんは何を言つているんだ」

「たたたたたまは何も視てはおりませぬ！」
「わざわざ正直にどうも！　いつたい何を言つてはいるんだ。まずは落ち着いてくれねえか」

男は両手を上げて身に覚えがないと訴えるが、一種の威嚇行為にも見えなくもない。怯えきつたまに、根がいい人なのだろう、男は距離をとつてしまがみこんだ。目線は合わせて、両手は降参を示すように上げられたままだ。

この男が言うには、夕刻に幼げな女の子が一人でいて、しかも突然ひっくりかえつて気絶したものだから、その場に放置もできずに寺に運んだということだつた。なかなか目覚めず、しかし目立つ怪我もなく、つい気を緩めていたところ、突然起きて出ていく気配がした。それで仕方なく背後から声をかけたのだと証明した。

それなら誰か近くの家人を呼んでくれとも思わなくはないが、できない事情も時にはあるものだ。少なくとも、たまの目には男が嘘をついているようには見えない

かつた。

「すまん、怖がらせるつもりはなかつた。やむを得なかつたんだ。あの通りは、まだ危ないモノが……」

はたと男が言葉を止めた。一方、存外真つ当な応対をする男にたまはほつと安心して、そんな様子には気がつくはずもない。人間にも良いものがいて悪いものがいるように、きっとあやかしもそういうものなのだと早合点。たまこそ申し訳ありません。辻であやかしさまが、な、為されていたこと、

「ご親切に、ありがとうございました。辻であやかしさまが、な、為されていたこと、たまは一切合切何も見てはおりませぬので！」

言つてから、アツと口を押さえる。見ていないのなら言わない方がよかつた。見ていないのだから。男はにやりと笑つた。

「ははあ、そういうことか。合点がいった」

たまは両手で顔を覆つた。要らないことばかりこぼすのだ、たまの口は。男は立ち上がると、すたすたと距離を詰めた。たまは縮み上がるばかりで一步も動けなかつた。

「そう、おまえさんに聞きたかったんだ。覗えているのか、どこまで覗えるのか――全部覗いていたんだな」

笑った男の顔が、よく見えない。

しばしば客から聞く怪談では、おどろおどろしい化け物たちが『見（見た）な』と地の底を這うような声で責め立て、追い立て、襲ってくる。そう、男がいくら親切でたまを介抱してくれた良いあやかしだとしても、それは変わらない。

——彼は町を騒がす、辻のあやかしなのだ。
たまはまた地面に這いつくばつた。男が狼狽（うろた）えたのを空気で感じ取るが、そんなものは関係ない。

「そもそも申し訳ございませぬ、辻のあやかしさま！」

「ま、待て、なんだって？ 辻のあやかし？ この俺が？」

「血みどろ、ぶしゅりな事件などたまは見ておりませぬ！」

「そちら、はつきりと視ているじゃないか！ いや、俺は怖がらせたいわけじやなくてな、確かめたいだけなんだよ。なあ、おまえさんは俺を、俺と一緒にいた奴を見たんだな？」あの辻で、俺があやかしを斬ったのを見た

「ひええ、やはりお斬りに……た、たまは口が裂けても誰にも言いませぬ！」

「信用ならん口だが……いや、今はそんなことはどうでもいい。信じてはもらえんだ

ろうが、俺はあやかしを斬る側だ」

「あ、あやかしを？」

「だから、教えてほしい」

そう言って、男は己の目を指さした。そしてたまの目を覗き込む。逃げようとして、たまは尻もちをついた。

「なあ、きみにはあやかしの——彼方（かなた）に棲むモノの姿が、はつきりと視えているな？」

「……」

たまは思いつきり目を逸らした。

人の世である此方（こなた）の反対側には、あやかし、幽霊、その他化生（けいそう）の存在する彼方（かなた）の世がある。普通、それは人の目に映ることはない。

そこにいる存在に見えると気がつかれてはいけないと、遠い記憶の中で、父によく言われていた。あやかしとは言葉を交わしてもいけない。近くに寄らずに互いの境界を守っているべきだと。

うつかりしていたと唇を噛む。だって、大体のあやかしは知らぬふりして通り過ぎれば、ここまで関わってはこないから。攫われたり脅されたりしたこともない。

そういう存在がいるのは物心ついた頃から知っていた。けれど、今まで深く関わったこともないのだ。

たまの目は常人と変わっている。

左目に此方（こなた）を、右目に彼方（かなた）を映し、二つ重ねてその境界を視る——ゆえに、たまは

人一倍、怖いモノを見つけやすい。あの角に老婆がいる、誰もいない部屋に子供がいる、幼いたまは何度か口に出してしまったこともある。それを父は優しくしなめてくれたものだつた。

異なる世が見える者は、良くも悪くもその橋渡しをしてしまうと言われている。胡乱なものに狙われる。怖いことに巻き込まれる。だから、気づかれてはいけない。

この男はたまの目が特殊であることを感じ取つたらしい。

「ようやく俺にも運が向いてきたというわけだ。なあ、おたま、その目でもう一度、今度はようく見てくれねえか。俺は……あやかしなのか？」

なんで名前を、と言いかけて、そういえば自分で「たまは」「たまが」と連呼していたことを思い出して閉口する。

「頼む、俺はまだ……」

声に滲む切実な響きを感じて、たまは恐る恐る男を見上げた。

じつと見つめて、そっと左目に蓋をして、次に右目に蓋をして、おやつと動きを止めた。おかしい。何度やつても同じ景色に首をひねる。左の目にも、右の目にも、頭からつま先まで男は同じように映つていたのだ。

あやかしの視え方は時によつてまちまちで、体半分がゆらゆらと蜃気楼のように揺れて見えるだとか、頭だけがちかちかと光っていたとか、影絵のようだとか、はたま

た残像のように見えるだとか、そういう風に映るものだつた。たまがあやかしを見る時、左の目に映る姿と、右の目に映る姿は決まってばらばらなのだ。

見る。見る。黒い陰りのようなものを背負つた侍がそこにいる。決して生きた常人のそれではないが、だからと言つて彼方^{かなた}の存在とも視え方が違う。右の目にも、左の目にも、はつきりと同じように映り込む。重ねた景色に違はない。

これではまるで――

「お、お侍さまは、あやかしではないのですか？」

たまは驚いてこぼした。そういえば、あやかしを斬るのだと彼は言つていた。

――つまり、彼もたまと同じ世界を見る人間なのか。

たずねてみると、彼は少しだけほつとしたような表情になつて、いいや、と首を振つた。

「生憎と、俺の目には人があやかしも同じに見える。どちらも見ることはできるが、違いがわからんのだ」

「すみませぬ、たまはてつきり……」

「この俺が、あやかしだと？ 俺はまだ死んじやいない」

それにしては、とたまは改めて男を視た。

端的に言うならば、男は影のようになつて仄暗かつた。ちょうど真上に薄く影を落とした

みたいに、ほんのりと陰っている。夜とは言え、月明かりの下、木陰、篝火かがりびの側でも光の加減が全く変わらないのはいくらなんでもおかしい。

そのくせ、顔の造形ははつきりわかるのだから不思議である。輪郭は蜃氣樓のよう

に揺らめいては止まつて……を繰り返していた。

「だが、きみのように普通の身体でもない。あやかしに近い、故にきみも誤解したの

だろうな」

「えつ」

あやかじやないと言つたのに！

たまたが驚いて見上げると、男は楽しそうにからからと笑つた。子供みたいにあしらわれたと気がついて頬を膨らませると、それを見て彼はまた笑い、軽い調子で詫びた。

詫びてから、不思議なことを言つた。

「嘘でも冗談でもないさ。事実、俺はまだ死んじやいなくて、普通に生きててもいい。どちらも正解だということだ」

それは一体どういう状態なのだとたまは首を傾げた。なぞかけだらうか。たまはあまりその手のものは得意ではない。

男は歩こうか、と町のほうに顎をしゃくつた。

「きみもそう長くここにいるわけにもいくまい。見送るついでに、一つ俺の話を聞い

てくれないか」

「はあ」

たまはおとなしく後に続いた。少しばかり前の話にはなるんだが、と男は前置きした。

「家にあやかしが紛れ込んだんだ。人知れず退治しようと意気込んだがしくじつてな、俺はまんまと身体を奪われて呪いをかけられた。だが、その時に完全に死んだってわけでもないらしい。半死半生といったところかな、普通に生きていた頃と加減は違うが……あやかしみたいに常人に見えないということもない。だが、気がついてもらえないこともある。相手が認識しなけりや、俺はあやかしみたいに見えないものになつちまう」

要はどっちつかずの存在なのだと語る。口調は淡淡としているが、双眸はまつすぐ

に目の前の闇をにらんでいた。

男が蜃氣樓のようにゆらめいているのは、此方こなたと彼方かなた、そのどちらの存在もあるから。だから、たまの両目に変わらなく——それでいておかしな風に映つてているのだ。あやかしを斬る半死半生の侍——それが、辻のあやかしの正体。

本題に入ろう、と男が手を叩き、まだ本題じやなかつたのか、とたまは驚いた。

「細かいことは追々話すが、俺の身体を取り戻すためには、此方こなたに縛られた百八のあ

やかしを彼方に還す必要がある。そうあやかしと約束した」

「百八！ 多すぎやしませんか！」

「まあ。世の中に妖怪譚がありふれていると言つても、俺には生きた人間と紛れ込んだその区別がつかない。まるきり人の姿から外れてりやあ楽なんだがな……、そこで、おたま。きみの出番というわけだ」

急に言わされたので、たまは前につんのめる形で急停止した。なぜそこでたまが出てこなければならぬのか。

「あ、あのう、たまはただの団子屋の娘です」

「いやいや、謙遜することはない。俺一人では、辻に居座るしか術がないんだからな。あやかしの出やすい時間まで粘つて、怪しいやつを見つければ相手が人かあやかしか数日監視して……それでも尻尾を出さないと斬れるもんも斬れない。だが、おまえさんならわかるんだろう。どれだけ巧妙に隠れていても、視ればそれとわかる」

「おおお待ちください！ た、たまはとてもお役に立てるような者ではございませんぬ！」

たまは大慌てで頭を振った。堪つたもんじやない、と思う。どうして、怖い話に首をつつこまねばならないのか。

百八のあやかし——実際にはこれまでに男一人でもどうにかしているだらうから、

残りはもつと少ないのかもしれないが、いつ終わるとも知れない話なのだ。ただ視えるだけの、たまの力を買い被られても困る。

第一、一介の町娘には危険極まりない話だ。帯刀した侍に、未知のあやかし。侍である彼は戦いなれていようが、たまは精々包丁しか握ったことがなく、包丁だつてまな板の上の魚や豆腐と闘うばかりの日常なのに。

そんな小娘を連れて、彼はどんなあやかし退治を演じるというのだろう。まさか囮おとりとして……というわけでもあるまい。

「たまは身を守る術も知りませぬ。きっと足手まといにござります」「もう……」

男は渋い顔になる。額に手を添えての思案顔。

この隙に逃げてしまおうか、なんて考えもよぎる。

しかし男が居合の達人なら一瞬でお陀仏だからじつとしている方が吉か、もし斬るつもりなら既に斬っているはずだらうから今からでも逃げるが勝ちか……などと迷つているうちに、男がまたたまの方に目を向けた。たまは逃げそびれた。

「なるほど、まずはきみを安心させねばならん。確かに、いきなり巻き込むのも、道理が合わないか」

「わかった」

「おわかりいただけたでしょうか」

「ああ、ちと考えて出直そう」

「……出直す、です？」

「あい」

うつかりたまは頷いてしまった。できないことをできるというつもりはないが、で
きる範囲の話なら、たまは頼まれごとに弱いのだ。

再び歩き出した二人は、あつという間に橋のたもとについた。驚いたことに、見覚
えのある橋だった。

「ここからは近いのか、きみの家は。腹が減っていたら……」

「いえ、たまの家には団子やお饅頭がございますので、ここまでで！」

「ふうん、団子に饅頭ねえ」

男は考えるように明後日の方向を見て、またたまの方を向いた。

何を考えているのか、楽しんでいるのか、さつさとお暇しなければと、たまは口に

言い聞かせた。余計なことを口走る前に、早期撤退が肝心だと言い聞かせる。

「で、では、お侍さま。たまはここで」

「そうだおたま、名乗り忘れていたな。俺は夜四郎だ」

「夜四郎さま、でござりますか。その、本日はありがとうございました！」

唐突な自己紹介に首を傾げながら、たまは急ぎ足で橋を渡る。背中に声がかけら
れる。

「あやかしは斬つたが、近ごろは怪しい人間も多い。近くまで送つてやろうか？」

「結構でござります！」

笑い声がして、風が吹きつけた。せめてお辞儀だけでもしておくべきかと振り返る
が、渡り切った橋の向こうには深い闇が落ちていて、何も見えなかつた。ぞぞぞと背
筋が粟立つて、たまは跳ねるようにかけ出した。

たまはかけっこなら得意なのだ。

式

結論から言えば、たまは大して叱られなかつた。

おかげさんもだんなさんも「ずいぶんと遅かつたねえ」と口を丸くはしたが、「まあ、娘つ子一人で出歩くもんじゃないよ」と言つて、それだけだ。身構えていたたまとしては拍子抜けだったのだが、半刻もすると誰の口からも昨日の晩の話題は出てこなくなり、翌日にはたまもけろりとして普段通りに戻つたのである。

たまの働く「志乃屋」は通りに面した表店おもてだなで、それなりに繁盛している。ただ、店で食べていくというよりも買つていく、あるいは家まで届けるように頼む人が多い。春の穏やかな陽気の下、店先に並べた床几しようぎにはお客様が数人腰かけて、団子や麦湯を楽しんでいる。

「おうい、おたまちやん、一皿！」

頼まればすっ飛んでいく。世間話をしながら、次のお客様が来れば声をかける。たまは注文を取つて、団子を渡して、また次の人の注文を取つて、近場に届けて……。そうやつて日暮ぐるしく働いていると、おかしなものが見えることも、それについて考えることもなかつた。

あさり売りや豆腐売りが通り過ぎて、何人か見知った顔や見知らぬ顔が客として来ては帰つて、昼過ぎになつて、おかみさんから休憩しておいでと声がかかつた。ついでに炙りすぎた団子と茶も出してくれたので、たまは早速店先で食うことにしてしまつた。

どのみち、今の時間は客が少ない。たま一人店先で食べても営業妨害にもなるまい。熱い茶に、糖蜜のかかった団子、貰つた漬物をそえる。
ほくほく、ぱりぱり、ごくごく、もちもち、ぱりぱり、ごくごく……
こうしてのんびりと陽に当たつている今はなんという贅沢な時間だらうと堪能していた。

——大抵、そういう時に来るものである。俗に言う嵐といふものは。

「よう」

覚えのある声。振り向いたら、覚えのある姿。嵐も嵐、大嵐、そこにいたのは辻のあやかし改め、夜四郎だった。食べ終わつた頃でよかつた、食べている最中だつたら取り落としていたにちがいない——たまはあんぐりと口を開けた。

「や、夜四郎さま、なぜここに」

「なぜもなにも、昨日話なら聞くと言つたじゃないか」

確かに言つた。たまは昨日の自分を恨む。

しかし、昨日の今日で住処を言い当てられてしまつなど！

驚くたまに、夜四郎はあつさりと言う。

「おたまが言つたんじゃないか、家は団子屋だと。空の菓子箱も持つていたし、前掛

けにも屋号が入っていた。あの辻から近いのはこの店だしな」

どうやらたまの口が軽かつたらしい。慌てて口を押さえるが、出てしまった言葉は戻らない。迂闊な己を重ねて恨みながら、たまは慌てて立ち上がった。

お客様ならもてなさなければ。ちょうどおやつも終わつたところだ。

「で、でしたら、どうぞ……お団子でよろしいでしようか」

「ああいや、すぐに終わる用事だ。団子を食いに来たわけではないさ」

「ここは団子屋でございますが」

言いながら、たまは改めて夜四郎を観察した。

お天道様の下にいても相変わらず、日陰に立っているかのように陰っている。かなりの長躯で目立つはずなのだが、通りを歩く誰もこちらに注意を向けていない。店内に目を向けても誰もこちらを注視しているわけでもない。

あやかしと人の狭間にいる、香氣で、町娘にも気さくな風変わりな侍。彼はどこから来て、どうやつて暮らしているのか。あの寺にはいつから棲みついているのだろう。たまは彼にどう対応するのが正解なのか、考えあぐねていた。

「今日はおまえさんに相談があつてきたんだ。おつと、俺の手伝いの件じゃないぜ、今回のところは」

夜四郎は静かに床几に腰を下ろした。とんとん、と隣を促されるので、たまは問を

あけて座つた。

「おまえさん、これまで——十年くらいか？ 視えることをどうやつて隠してきたんだい。どれほど幸運だったかは知らんが、考え方がすぐくに顔に出るきみのことだ。これからもそううまくいくとは限らないだろう」

「それは……そうですが」

たまとしては、これまで大丈夫だったのだから、これからも大丈夫なのだろうといふ漠然とした考え方がない。夜四郎は違うらしい。

「巷の噂話に耳を傾けてみな。それがどこまで真実かは定かでないが、奴らはどこにだつている。昨日と同じ場所にいるとも限らないし、何かの拍子で——昨夜俺に見つかったみたいに、思わぬ事態になることもあるだろう。おまえさんがそこは一番よくわかっていると思うがね——

常であれば、此方こなたと彼方かなたの往来は簡単に叶うものではない。触れようとして触れられるものでもなく、視ようとして見えるものでもない。ただ、抜け穴となる通り道がそこかしこにあるのもまた確かで、そういう穴を通つて出てくるあやかしもいる。

そういうあやかしは非常に不安定な存在だ。迷子の根無し草が、より長く此方こなたに居座り、此方に定着するために、彼らは人と縁を結ぼうとする。食うか、囮うか、憑りつくか。縁に縛られてさえいれば、永く在れる。

「おまえさんはそういう意味で適任だろうよ。彼方を見るから、あやかしを認識できる。それがこの方への橋渡しになる。一度認識されれば縁を結ぶことなんてどうにでもできるからな。視えるとわかれは、悪いあやかしはござつておまえさんと縁を結びに来るだろうな——どうだ、危険だろう」

そう言われてしまえばたまは何も返せなかつた。

これまで父が自然とたまを守ってくれていた。父が流行り病で亡くなつてからも、あちらは鳥がうるさいから別の道を使おうだとか、父が使うなと言つてくれたこちらの道は避けるとか、辻は明るいうちに通つて、それ以外は目を伏せたまま足早に過ぎるだとか、たまなりの方法で回避してきた。

昨日はたまたまうつかりしていただけで、昨日までは変な存在に目を付けられたこともないものである。

「そら、さつそくこれまで通りじやなくなつているじやないか」

「そうですが、どうすればいいでしよう。頑張つて見えなくなるものならとっくにそうしています。目隠しをするわけにもいきませぬし」

「いいんじやないか、眼帯。おまえさんはそそつかしいが、そこまで鈍臭くもないだろう。一つやつてみるのは手だぜ」

夜四郎は袂たもとから巾着を引っ張り出すと、そこそと中を漁る。何が出るかと思えば、

細長いただの布切れだつた。新品だ、とたまに押し付ける。よくもまあ、都合のいいものが出てくるものである。

たまとしては冗談のつもりだつたので、苦笑いのまま布と夜四郎とを見比べた。

「ええと、目はすこぶる健康なのにいきなり隠すのです? とても怪しくないですか?」

「そんなもの、怪我をしたとでも言やあいいのさ。腫れ物でもいいが、医者にみせなきやならなくなつちまうか。そこはまあ、上手く言えばいい」「ええ……」

たまに考へると言うのか。

病気だと店に出してもらえないかもしねないので、軽い怪我か少し調子が悪いとかにしておくのが無難だろうが、傷一つないのに怪我もへつたくれもあつたものじゃない。もしくはどこかで読んだ本の影響を受けたということにするだとか。

変に心配させることもないし、それがいいかもしない。

夜四郎は本当にこれのためだけに来たらしい。布を渡すとさつさと立ち上がつた。

近くに変なモノがないかを見て回るというのだが、間違なく今一番の異物は夜四郎自身である。

貴重な目だ。みすみすあやかしなんぞに見つけさせるものかよ」

「エ、あのう、夜四郎さま、たまはあやかし退治の件はお断りを……」「わかっている、わかっている、そちらは追々考えるさ」

まるでたまの言いたいことを理解していない風に、夜四郎は手をひらひらさせて無理矢理話を打ち切った。たまはむうと唇を尖らせる。

この男、人の話をまるで聞いていないのではないか。確かに強引な手には出ていないが、たまを諦めるつもりもないらしい。

思わず半眼で見つめると、

「いやいや、なにもおまえさんが矢面に立つことはない。どこに妖しいモノがいたとか、客からそういう話を聞いたとか、それを教えてくれるだけでいいんだ」

などと言う。そうすると、単純なたまは、お話だけならとすぐに流される。

「それなら次はお団子を食べていいってくださいね」

「ううん、そこも追々考えるとしよう」

「食べないお客様がいらっしゃると困ります」

「長居はしない。それに俺がいまいが変わらんよ。言つただろ、半死半生、かんな彼方に片足を突つ込んでいるんだ。いると思えば見えるが、そうじやなけりやあぎりぎりまで近づかなきや見えないもんさ」

夜四郎は自嘲するように言つてから、そら、と通りを顎で指した。たまが目で追うと、旅装束の若い男が立っていた。彼は手近な床几に腰を下ろすと、団子と麦湯を頬むなり持つてきた紙とにらめっこを始めた。

風が吹いて、振り返ると、夜四郎の姿は消えている。たまが旅の男に気を取られているうちに、さつさと帰つたらしい。言いたいことは言つて満足したのだろう。

——もう、勝手な人！

たまは頬を膨らませた。どうせ、しばらくは飽きもせずに来るのだろうから、文句の一つくらいは許されると思いたい。貰つた布を袂わきに仕舞つて仕事に戻つた。

翌日になつて、たまは早速布を卷いてみることにした。試行錯誤の末によく巻けたのだが、姿見に映つた自分は客観的に見てもおかしくて思わず噴き出してしまつた。

「夜四郎さまもこれを見たら笑つてしまふかも」

時折結び直さないと緩むが、動いてみても思ったよりも支障はなかつた。存外に適応能力が高いのか、四半刻もしないで普段と変わりなく動けるようになつてくる。だんだんと「これならば昔話の英傑に見えなくもないのでは」とさえ思えてきた。もちろん、団子屋の面々は目を丸くして風変わりな看板娘を見た。

「あんた、どうしたのさ、その目は」
腫れ物じやないか、怪我でもしたかと質問攻めにあつたが、たまはけろりとして胸を張る。
せきがん

「隻眼おたま、志乃屋の新しい名物です！」

そう言つて普段通りに開店準備を行えば、

常連客のウケも悪くない。

「おたまちやん、そひつまどうした
官道客の、金を取るにし

卷之九

目を丸くする力もいる

お、本当に眼帯娘じゃないか。こいつはいなせだねえ

いた。
詰めに聞いてやつてきて がんばるに騒し立てる人もいる
たまはすつかり得意になつて、半日もすればたまの眼帯姿は店にすつかりなじんで

さて、昨日の旅人が再びやつて來たのは、夕方に差し掛かる頃だつた。さうして、「おまえさん、おまえさん、おまえさん、おまえさん、おまえさん」と、

ふらりとやって来て、昨日と同じように団子の皿を瓦版や簾絵を広げて思案する姿も昨日と同じである。

こまはなん二なん、その丸まつて背中が氣こなつ

「こ
ん
に
ち
は

声をかければ、男は顔を上げて微笑んだ。

「やあ、本当に眼帯をしているんだ。志乃屋のおたまさんが風変わりな装いを始めた

とあちこちの噂で聞いたけど

「いや、まだ噂にならていないんでですか！」

しみじみと言ってから、俺とは大違ひだとため息をついた。

彼は佐七といつて、聞けば、田舎から出てきたばかりだそうだ。働き口は縁を辿つてどうにかできたが、わざわざ出てきた目的は別にあるらしい。

人を探していると
「人探し……ですか」

そう言つて、睨めっこして いた紙をたまに見せた。なんとも味のある——要はこれ 一つを頼りに人搜しはいささか無謀とも思える一枚だつた。

たまはハの字に眉尻を下げて、白旗を揚げた。

たまは六つか、七つの頃から志乃屋にいる。それなりに顔は広いと思っていたのだが、似顔絵一つで人探しをできるほどではない。

「どなたですか？」

「俺のおつかさんだ。名前はお滝おたき、背の高い美人だつて話だが、親父が描いた素人絵と繰り返し聞かされた思い出話、これくらいしか手がかりがなくてなあ」

「お滝さんですか……」

たまは答えて窮した。なにせ、たまの知っているだけでも近所のお滝さんは四、五人いる。見たところ十八ほどの佐七の母に当てはまる、と考えると今度は逆に条件に当てはまりそうな人が消えてしまう。離れて暮らす子のいる母に覚えはなかつた。

「もう、お滝さんはいつぱいいるのですが……」

「ああ、そりやそうだよな。だが、何事も一つずつ、だ。会つたらでいいからさ、それとなく伝えてみてくれるかい。おつかさんを探している、佐七がいるつてこと」「あい」

たまは頷いた。それくらいお安い御用だ。

さらに佐七から話を聞いたが、やはり手がかりはろくに得られなかつた。佐七がまだ幼い頃に離別していること、どこかの店の娘で、しかし店の名前ははつきりしないこと。

「そういえば、蝶の簪かわらだ。鼈甲べっこうのやつで、親父、一緒になる前にうんと奮発しておかさんに贈つたらしい。おつかさんはいつも身に着けていたって聞くよ」

手がかりはそれくらいだつた。

帰り際、佐七は「くれぐれも、何かあつたら教えてくれよ」とたまに頼み込んで、またもたまはこれを「あい」の一つで安請け合ひした。遠ざかっていく佐七の背中を見送りながら、どうしたものかと腕を組む。

夜四郎のあやかし退治の話に、佐七の名前しか知らない人捜し。話を聞くと言つたからには、できることはしたい気持ちに嘘はない。とは言え、たまは一介の町娘なのだ。できることと言えば風聞を集めて、教えてあげるくらい。

せつかくなら夜四郎に協力してもらおう、と思いついたのは翌日のことだつた。たままで、夜四郎を全面的に信頼したわけではないものの、彼の事情が気にかかるつているのも確かである。

——身体がないつて、どんな感じなのかしら。

たまから見れば、彼は普通の人間と変わらない。服を着て、しつかり受け答えもし物にも触れられる。人の目に映らないこともない。助けられたことも確かなので、礼のために団子をいくつか差し入れることにして、

包みを手に通りに飛び出した。「あんまり遅くなるんじゃないよ」というおかみさん

の声に「あい」と元気に返して、足取り軽く道を辿つていく。

——ええと、薬屋、一膳飯屋を通り過ぎ、小間物屋さんの向こうで辻に出て……

件の辻に差し掛かるとき、無意識に手に力がこもる。

明るい時間の辻は人通りも多い。

そこに女の背中を見た。背の高い、白い肌の女は考え込むように顔を伏せていた。時折あたりを見渡しているその背中に、たまは見覚えがある。

「あらっ」

女の方もたまに気がついたらしい。少し眉間に皺を寄せて（彼女は少し目が悪かつたから、遠くを見るときによくこの表情になつた）、すぐに微笑みを浮かべた。

「おたまちやん？ まあなんて懐かしいの？」

たまにとつてもとても懐かしい人がそこにいて、思わず駆け寄つた。

三十路すぎの、よい香りを纏つたその女は、隣町の小間物屋の一人娘だつた。

たまは幼い頃、何度も隣町に行つた時に遊んでもらつていてよく覚えている。遊んでもらつて、祭りにも連れて行つてもらつたこともあつて、季節ごとに何度も文のやりとりもして。

「お滝さん！」

けれどこのところはすっかり疎遠になつてしまつていて。
「すっかりお姉さんになつて……その目はどうしたの」

「なんともないのですよ、似合つていませんか？」

「ええ、素敵。芝居に出てきそうなくらいに。あなたのこと、気にしていたのよ。元氣そうでよかったです」

滝は柔らかく微笑んだ。お滝さんこそ、とたまも笑つた。

幾分か身長の伸びたまと違つて、滝は記憶の通りで変わらないように見えた。

「お滝さんはお出かけですか？ よかつたら志乃屋にどうでしよう」

夜四郎に会いに行くのは今日でなくともいい、せつかくの再会を楽しもうと思つたのだが、滝はゆるりと首を振つた。

「ごめんなさいね、おたまちやん。……人を捜しているのよ」

聞けば、滝は最近近くに越してきたらしい。後であいさつに行くと言つていたが、寝耳に水だつた。どうにも人捜しのためで、隣町で捜して、この町で捜して……とずいぶん熱心に捜し始めたらしい。

「噂を聞いたのよ。あの人が戻ってきたつて」

「お滝さんは誰を捜しているの？」

「男の人」

「たくさんいますよう」

滝はからかうようにころころと笑つてから、ゆっくりと目を細めた。
「おたまちゃんは私の旦那に会つたことはあつたかしら。まだうんと小さかつたものね」

そう聞かれて、たまは固まつた。

滝の身に降りかかったことは聞いていた。

何年も前のこと、滝は夫とまだ小さな子供を同時に亡くしていた。流行り病だつたらしい。仲のいい家族だったものだから、その悲しみはとても深く、誰にも会わないようになつてしまつたのだ。

何通か手紙を送り、会いにも行つてはみたが、結局は彼女を慮おもんばかつて「しばらくはそつとしておきましよう」と、そういうことになつていた。

たまは答えに窮して黙りこくつてしまふ。あれから滝の時間は動いてないのか、そんな時になんと声をかけるのがいいのかしら——悩んでいると、滝自身の明るい声が話を転じてくれた。

「そうそう、ここで会えたのも何かの縁だわね」

助かった、そう思いつつも、そういえば滝の表情が明るいことに気がつく。前に見かけた時は憂いのある横顔だったが、今は目を爛々と輝かせて吹つ切れたようにも見

えた。

きっと良いことがあつたのだ、とたまは己を納得させた。それが何かはわからないけれど。

「ね、たまちゃん、うちに遊びにいらっしゃいな」

突然降つてきた声に咄嗟には反応できずに、

「え？」

たまは首を捻つた。それを拒絶だと思ったのか、慌てて滝は言い加えた。

「ああ、ごめんなさい、勿論今日じゃなくともいいの。あなたはこの町に詳しいでしょ？」色々と教えてくれないかしらと思つて

今日は用事があるんでしようし、また今度、と滝はたまの手の小包を見遣つた。たまは先ほどまでの空気がすっかり消えたことに胸を撫で下ろして、笑顔で頷いた。

「あい、おまかせを！」

「引き止めちゃってごめんなさいね」

「ううん、お滝さんに会えて楽しかつたもの」

「まあ、嬉しいことを言うのね」

そう言うと、滝は小さな紙片をたまに渡した。目を走らせて、それが滝の住む長屋の場所だと理解する。

こんなところに長屋なんてあつたかしら、と思いながらも、それを大切に受け取った。

「おたまちやん。きっと遊びに来てね」

たまは小さく領いて滝の背中が雑踏に溶けるまで見送った。

——それにも人搜しが多い。

そう考えてはたと立ち止まつた。

——そういえば、佐七が探していたのも「お滝」だったと思い出したのだ。それから、あの美しい人もまた「お滝」なのだと。



破れ寺への道はすんなりと見つけられた。小川にかかる橋を渡ると変に人気がなくなるが、不思議と恐ろしい感じもしない。傾いた門、鳥だけが客の境内、あの晩の通りの寺に夜四郎はいた。

やつて来たたまを見て、夜四郎は大いに笑つた。

「まさか本当に眼帯娘になつてゐるとは。支障はないのかい。おまえさんの方から俺を訪ねてくるなんてなあ」

「結構いけるものですよ。先日のお礼がまだだと気がついたのです」
 言つてから、たまは改めて寺の中を見た。生活感のまるでない空間である。水甕の中身すら怪しいが、流石に空ではないらしい。とは言え、あるものと言えば欠けた湯呑みと文箱、大量の古紙と、傾いた文机、それくらいのものである。

辺りを見回していると、視界が夜四郎に遮られる。はつとして、たまは団子を手渡した。

「夜四郎さまは、こちらに暮らしてらっしゃるのです？」

「うん、そうだ。あやかしの話があれば此処に来てくれ。俺がない時は、紙に書き残してくれりやあ、俺の方から志乃屋に行く」

やはり、ここに暮らしているので間違いないようだつた。

それにしては、なんと生活感が薄い。寝具もないのではないだろうかとたまは眉尻を下げた。思つたよりもうんと苦労しているのだろう。

——親切なお侍さまだし、ほんの少しくらいなら、お手伝いするべきかもしれないわ。だつていつまでも身体がなくてこんな暮らしをしていたんじや、大変だもの！ 相手がいかにも困つていると、たまはあつさりと縛されるようにできている。

夜四郎が気を利かせてせんべい座布団を濡縁に並べてくれたので、たまはそこに腰を下ろした。あやかし話はないのだが、来た用事はある。

「それで、何か聞きたいことでもあつたんだろう。わざわざ来るつてことはさ」

「夜四郎さま、ご存知ですか？ いま、人捜しが多いのですよ」

「今も昔も多いがなあ。たまの周りで多いのかい」

夜四郎は意外にも大人しく話を聞いてくれるつもりらしい。どんなものかと聞かれて、たまは聞いた話を語り出した。

田舎から出てきた佐七が探す「お滝」さん。誰かを探すために出てきた、たまの親切な「お滝」姉さん。

しかし、滝の息子はどうに亡くなっているはずで、佐七が滝の息子である可能性はないのでは、とたまは思つてゐるということ——皆から聞いた滝の話が、嘘でないのなら。

「二つの人捜しか。しかし、たまたまじやないのかな」

「そう思います。でも、お滝姉さんが、佐七さんの捜すお滝さんならいいのについて思うんです。優しい二人が、恋しい人に再会できるのはいいことですもの」

「んん、そいつは……どうかなア」

夜四郎は言葉を濁す。頭の中で何かをこねくり回しているらしく、目線は遠くに向いたままだ。何か、思い当たることがあるのだろうか。

「違うのです？」

「いつの時も、捜す側も捜される側も同じ思いとは限らないからさ」

夜四郎は首を傾げたままのたまを見る。指を一つずつ立てながら、たとえ話を列挙した。

盜人と同心、仇とそれを討つもの、あるいは生き別れた親子、恋人。それぞれに事情があり、それぞれが目的のために憐憫を誘うようにわざと演じ、関係性を偽る人もいたかと思えば、あるいは真に切実に捜してゐることもある。

「片方だけの言い分じや本当のところは見えんさ。だから、人捜しなんて軽率に引き受けるものじやない」

たまは口を尖らせた。

「でも、夜四郎さま。親子でしたらそんなに悪いことはないですよ。愛する家族に会えるんですもの」

「すべての家がそうとも限らないよ、おたま。一言に家族と言つても、どんな形かは外からじやわからぬものだ。思い込みはもつたひないな、おまえさんは人よりよく見える目を持つてゐるのに」

でも、と言いかけた、やめた。夜四郎を見上げると、どこか寂しそうな色がそこにあつたのだ。たまは出かけた言葉を飲み込んだ。

「二つの視点を持つことだ、おたま。追う側、追われる側、どちらにも理由があるの

は当然だろう。絡まつたものを見ないと、そいつを解くこともできない」

夜四郎はこの話は終わりだとばかりに、たまから受け取った包みを広げ始めた。空氣を変えるように楽しそうに笑いながら、彼は団子に食らっていた。

「それで、なんだ。おまえさんはちゃっかり俺に人探しを手伝えと?」

口の端を指で拭つてから、夜四郎はたまの頼みを引き受けた。

「まあいいとも、この話、俺にも囁ませてもらおうか。気になるしな」

いいのですか、とたまは目を瞬かせた。あわよくばとは思つていたのだが、まさか

本当によいとは思わなかつたのだ。あつさりと承諾した彼を拌むように見上げる。

「夜四郎さまは、存外に面倒見のよい方です」

「存外にとは心外だな。……おまえさんと話していると懐かしいような気持ちになるからかな、要らん世話を焼きたくなるのさ。うんと若返つたようでな、楽しいんだ」

それとまあ、団子の礼だと言つて夜四郎は優しく笑つた。その団子が先日の礼の品なのだが、彼としてはそうでもないらしい。

この口ぶりでは、弟か妹がいて、たまに重ねているのかもしれない。あるいは娘か——思えばたまは彼のことをまるで知らない。まさか身体を失つて、二度と家族に会えないのだろうかと想像して、ちりりと胸が痛んだ。

夜四郎はたまを橋のたもとまで送ると言つた。二人並んで歩く。

「まずはお滝さんつて人に話を聞くといい」

「あい」

「いいかい、あまり首を突っ込むなよ、おたま。おまえさんはか弱い。あやかしもそ
うだが、人間の妙な事件に巻き込まれても、困るからな」

やはりこの人はたまをいざという時の頼みの綱にしている節がある。まあそれでもいいか、とたまは思い直した。

たまにできることは小さいが、滝の力になりたいという気持ちは変わらない。佐七のことだつて、できることはしてあげたい。また昔のように、滝と笑い合えればそれがいい。

——それにしても、お滝さんの搜している人つて誰なのかしら?

参

通りの人を見つめたり、店の常連客に話を聞いたりしている。店にも早くも馴染んで、気に入ってくれたなら嬉しいとたまは思う。

佐七の手には、やはりあの拙い姿絵がある。

「佐七さん、なにか進展はありましたか？」

聞けば、彼は決まって苦笑する。残念そうに頭を振った。

「二、三人、お滝さんを訪ねてみたんだけど、おつかさんにはまだ会えてないよ。参ったなあ、この辺りの町だつて親父は言っていたのに。引つ越しちまつたかな」

頬をかいて、親父にもつとよく聞いておきやあよかつた、と佐七は呟く。聞いたところによると、彼の父は五年前に亡くなつたという。佐七も母との記憶はあるにはあるのだが、幼くて、細かい話は思い出せないのでと言つた。

たまは腕を組む。佐七とて、聞ける範囲は限られている。たまも聞けたとしてもこ

の志乃屋の周りが精々だろう。そうなると、もっと多くの目が必要になる。

「佐七さん、その姿絵を迷子石に貼つてはどうでしょう？

「この絵で？」

ううーん、まあ、同じようなものを描いてもらつて貼るのはありかも
しないかなあ」

「そうですよ。佐七さんのお名前と、いる場所を書いておけば、もしかしたら向こうから見つけてくれるかもしれません！」生き別れた子供ですもの、きっと会いたいに

られた。

佐七が食べ終わるのを待つてから、二人は並んで歩き出した。交わされるのは他愛のない世間話になる。

「そういうえば佐七さんはどちらに住んでいるのです？」

「すぐそこの長屋だよ。一番端の、マルに『佐』の字の部屋だ。何かあつたら訪ねて……と言いたいところだけど、居なかつたら青井屋の方にいる。一膳飯屋の――知つてる？」

「ええ、田楽が美味しいって聞いています」

たまの腹も同意するかのようにクウと鳴る。佐七は笑つた。

「うん、ウチのは本当に美味しいから、今度食べに来なよ。しかし、すまないなあ、どうしても店の近くだとか、そいつた場所ばかり探ししまってさ」

長屋の面々に話を聞いてもわからないという。似たような話は聞くような気もするのだが、やはり『生き別れた息子のいるお滝』程度では話がぼんやりとしすぎている。

立ち読みサンプル

はここまで